



令和6年10月6日に実施された「葛城市市制20周年記念式典」

「住みよさ」の土台は 自立性・独自性を育んだ悠久の歴史

奈良県（奈良盆地／大和平野）の北西部にあつて、県都・奈良市中心部からは25km圏内、

大阪市中心部からも30km圏内に位置する葛城市は、平成16（2004）年10月1日、旧北葛城郡新庄町・當麻町の2町合併により、新市としての歩みを開始。令和6（2024）年10月1日には市制施行20周年の節目を迎えている。

葛城市の市制施行後の歩みは、本年度21年目と新しい。しかし、葛城市エリアは周知の通り、奈良時代を象徴する都・平城京の誕生（和銅3／710年）以前、いわゆる古墳時代の有力

豪族で、当時の歴代天皇とも外戚関係にあつたとされる葛城氏の本拠地（大和葛城地方）として栄えた歴史を有する。葛城市の市名は北葛城郡から来ているが、地名としてのルーツは古く葛城氏の時代までさかのぼる。

葛城氏は5世紀から6世紀ごろに歴史の表舞台から消える。だが、8世紀初頭に平城京が成立した後も、大和葛城地方そのものの重要性は変わらなかった。

そのよすがは今日、例えば、共に推古天皇の時代（7世紀初頭）に整備・創建されたと伝わる、大阪と奈良を結ぶ日本最古の官道・竹内街道、数多くの国宝を有する當麻寺の存在などに見て取れる。

市域の西側に目を向ければ、8世紀に成立した『万葉集』所収のあまたの名歌にも詠まれた景勝地であり、現代は大阪府との境界線ともなっている金剛・葛城・二上の山並み（金剛山地）がそびえる。

また、旧新庄町地区には、日本最古の女帝

悠久の歴史を継承し花開いた「住みよさ」の形 集客・移住・定住支援で図る持続可能な未来!!



あ か ず ひ こ
阿古和彦
葛城市長

とされる推古天皇（6世紀末～7世紀初頭）よりも以前に、ごく短期間ながら時の清寧天皇崩御後の空白期間に政務を執ったことから、実は日本初の女性天皇ではないかともされる飯豊青皇女（飯豊天皇）の墳墓《伝承／北花内大塚古墳》など、貴重な古墳が数多くある。

さらに、8世紀に成立した『日本書紀』には、葛城の地が「相撲の始祖・當麻蹶速の生



なだらかな雌岳、男性的な雄岳が連なる二上山遠望



本堂をはじめとする国宝が8点、金堂をはじめとする重要文化財33点を持つ名刹(めいさつ)・當麻寺に向かう参道

「誕生地」であるとする伝承も記されている。

このように名所旧跡、歴史的事跡、ロマンあふれる伝承などに満ちた葛城市の土地柄は、歴史・文化の中心地であった近畿地方においてもかなり特徴的だ。

一方において、葛城市は現代における「持続可能なまちづくり」の最重要基盤となる「住みよさ」や「子育てのしやすさ」などに関し、現代的な尺度から計っても非常に高く評価される住宅都市として、市制施行以後、順調に進化し続けてきた。

葛城市の「住みよさ」の源泉の一つは、古代からの伝統そのままに、要衝という表現がぴったりの優れた交通環境面にある。葛城市は面積33・72km²のコンパクトなまちでありながら、近鉄南大阪線、近鉄御所線、JR和歌

山線の計7駅を通じて京都・大阪と結ばれ、大阪市中心部までも、急行を利用すれば最短約30分だ。道路交通網についても、南阪奈道路・葛城ICおよび大阪・松原JCT経由で、大阪市までわずか20分と、至近の通勤圏に位置している。

葛城市誕生当時の人口は3万5513人だった。その後は微増・微減を繰り返しながら、令和6年9月1日付の3万7850人（住民基本台帳ベース）をピークに、現在は再び微減傾向に入っているかのようにも見える。しかし、本年8月1日現在の人口3万7689人は、ほとんどピーク時と変わらない。

一部の大都市圏以外は人口減少がスタンダードになっている現況下、葛城市の人口の安定した推移に、住宅都市としての「社会的評価の高さ」を合わせれば、葛城市の人口に関する近未来的な見通しの現状は、むしろポジティブといえるのではないだろうか。

例えば、住宅都市としての実力を客観的数値で評価する、恒例の「住みよさランキング」(東洋経済新報社公表)における、葛城市への評価の高さは、首都圏に次ぐ人口規模を誇る近畿圏(大阪府、京都府、兵庫県、奈良県など)においても、まさに出色である。

具体的には、本年度版「住みよさ



ランキング」の総合評価で、葛城市は全国812市区*のうち63位と、トップから8%以内の高い評価を受けている。さらに葛城市は、令和元(2019)年度の全国34位を皮切りに、7年連続で全国の30位台・60位台の総合評価を得ており、奈良県では、7年連続で1位、大阪都市圏全域においても、常に上位3位以内に位置付けられているのだ。

特に最新の評価基準では、18歳以下の子どもの医療費無料化、老年人口当たりの介護老人福祉・保健施設定員数の多さ、20・30歳代の女性人口当たりの0・4歳の子どもの数の多さ(厚生労働省発表の最新データ、葛城市の令和4(2022)年度合計特殊出生率は、当時の全国平均1・33を上回る1・52)、25歳・44歳の子育て世代の占める割合の多さ、全国でも上位に入る安い水道料金の維持など、特に福祉面や生活面の住民サービスの手厚さが、多岐にわたって高評価されている。

*同ランキングによると千代田区、中央区、港区の3区は対象から除外



日本最古の女性天皇ともされる飯豊青皇女（飯豊天皇）を祭る北花内大塚古墳

昨年（令和6年）4月には、民間の有識者グループ「人口戦略会議」が発表した全国65の《自立持続可能性都市》（消滅可能性都市とは対照的に、100年後も若年女性が5割近く残り、《持続可能性》が高い都市）のリストにも、葛城市は人口減少が一般的に進む奈良県内で唯一、選出されている。

「そうした各種データは、あくまでも機械的に計算されたもので、一つの参考的視点からの評価に過ぎないともいえます。しかし、それでも緻密で客観的なデータの積み重ねによる施策・事業への高い評価は、近年の葛城市における、地道ではあるものの、自分たちなりに工夫を凝らしたまちづくりの方向性が、間違っていないのだということを、改めて示していただけているものと考えます。

ただ、その際にも決して忘れてならないのは、第一に、私たちが暮らしているまちの『住みよさ』や『子育てのしやすさ』などの構成要素は、現代に生きる住民の皆さんと、行政、事業者などとの連携によって成り立っているものであるということです。

同時にそれは、先人たちが構築してくださった、非常に深い歴史や地域資源の上にある

るものなのだという事実をきちんと踏まえた《共通認識》を、みんなで持ち合うことこそが、持続可能なまちづくりへの取り組みを、今後とも継続的に図っていく上では、非常に重要なポイントであると考えております」

旧當麻町地区の出身で、地域に根差した薬品卸売会社の社長として実績を重ね、さらに旧當麻町議会議員および葛城市議会議員を経て、平成28（2016）年に実施された葛城市長選に出馬して当選。本年度3期9年目を迎えた阿古和彦葛城市長は、そう語る。

ため池を活用する姿勢に宿る「住みよさ追求」の源泉

現代の葛城市の「住みよさ」「子育てのしやすさ」などを構成する要素の中で、先人たちの構築した地域資源を独自に活用し、大きな効果をもたらしている代表的事例の一つとして、阿古市長が真っ先に挙げるのは、葛城市における「水道料金の安さ」を可能にしている歴史遺産《ため池》の存在だ。

「年間降雨量が少なく気候温暖、大河や湖もないことなどから、奈良盆地では昔からため池がたくさん造られてきました。現在も奈良県全域では4000カ所以上の農業用ため池があるとされます。

葛城市のコンパクトな市域内にも、近世以前に造られた120カ所以上のため池が、現在も残されています。奈良県全域のため



二上山の山頂近くに設置されている非業の皇子「大津皇子」の墓

池の数からすれば少なく感じるかもしれませんが。しかし、葛城市のため池には、景観的な意味からだけでなく、特に利水的な観点から、地域資源の一つとして、旧町時代から盛んに活用されてきた特徴的な歴史があります。

葛城市では、10カ所のため池の水を、三つの浄水場で処理した後に、上水道の水源として、昭和30年代から70年近くにわたって活用してきました。ため池はまさに葛城市の《自己水源》であり、葛城市の水道料金はそのため、市制施行以来ずっと、県内12市の中で最安の水準を、維持できているのです（阿古市長）

上水道に活用されている10カ所のため池

葛城市

市 政 ル ポ

(奈良県)



ため池は市民の憩いの場であり、葛城市の原風景でもある

はいずれも、1730年代から1780年代にかけて築造された農業用水だ。現在は八つの水利組合などが管理している。ため池を水道事業に積極的に活用する取り組みは、昭和30年代の旧新庄町・當麻町（昭和41／1966年に町制施行する以前は當麻村）時代から行われてきたが、当初は地下水との併用だった。しかし、平成16年の市制施行以後は、ため池が上水道の主要水源（全体の約71%、県営水道の活用が約29%）となっている。

「葛城市が水道に活用している10カ所のため池の貯水量は、小規模のダム一つ分に匹敵する」（阿古市長）ともいわれている。葛城市の農業用ため池は、まさに地域のライフ

ラインの基盤の一つであり、地域資源（地域財産）そのもののものだ。

しかし、近代工法で造られたダム設備とは違い、近世以前の土木技術が基盤になっているため、メンテナンスの苦勞も少ない。

特に近年のような異常気象（線状降水帯の発生など）が続けば、洪水などの災害要因の一つにもなりかねない。葛城市ではそのため、市域全てのため池を緻密にデータ化し、管理を強化するとともにため池の余水吐に切り欠きを施して常時水位を下げ、ため池への急激な流入水を調節・放流する治水対策工事を計画的に実施している。さらに《ため池ハザードマップ》を作成して市民の注意を喚起するなど、水害対策にも怠らない。

「ため池を《自己水源》の基盤として使うメ

リットの第一は、水道料金を自分たちの判断で安く設定できるところにあります。さらに、もう一つ重要なのは、都市としての自立性、独自性を保つ上でのいろいろな意味での基軸、バックボーンとしての役割もあります。

奈良県では現在、葛城市と奈良市を除いた26市町村と奈良県が奈



「子育てのしやすいまち葛城市」を支える子育て支援センター。その充実ぶりは子育て世代の大きな支持を集めている



令和5年8月30日に開催された「葛城市こども議会」。まちの将来を担うこども議員たちからはユニークなアイデアが次々発せられた

良県広域水道企業団を運営しています。実際、企業団に入った方が水道施設の老朽化対策にも有利だし、水道水の安定供給を図る意味で確実性があるのも確かでしょう。葛城市の内部でも、奈良県広域水道企業団に加入すべきではないかとする議論はあります。

しかし、私は葛城市の地域財産としての《自己水源》を活用した形で成り立つ水道事業の在り方は、地域の伝統文化なのだと考えています。県の水道企業団に加入すれば、10カ所のため池を三つの浄水場で処理するという、現在も続く伝統文化は喪失されます。それによって、自ら水道料金を設定できるという『都市としての自立性』までもが、喪失されてしまうように思われてなりません。



毎年7月、當麻蹶速にちなんで相撲館前庭（當麻蹶速の塚）前で行われる「けはや法要」は、現役力士全員の安全祈願ならびに物故力士の追善法要

集客・移住・定住支援の推進で図る 持続可能な未来づくり

そこで議論が高まりつつあった令和4年12月6日に『県域水道一体化に関する市民説明会』を開催し、奈良県広域水道企業団には参加しないという方針を、私は改めて打ち出しました（阿古市長）

阿古市長のその決断は、多くの市民の賛同を得た。もちろん阿古市長も、諸般の事情の推移によっては、いつか県の広域水道企業団に加入する可能性も否定してはいない。ため池という前近代の地域資源を活用した水道設備は、細かなメンテナンスが常時不可欠で、それが時には水道料金の値上げ（全国平均より低い料金水準を保ちながらも）につながる可能性をも、認めている。

しかし、自分たちの努力や工夫によって、何事においてもきめ細かな市民サービスの提供が可能なのは、それを実施することこそが、基礎自治体としての真の意味での「市民ファースト」の在り方であり、それができるうちには貫いていくという覚悟

を、葛城市における水道事業を巡る決断は示しているといえるだろう。

それは一方において、本欄でも過去にご紹介してきた、総合的な意味での「住みよさ」「子育てのしやすさ」で知られる全国各地の自治体に通底する「覚悟」を想起させる。換言すれば、それは自治体としての自主性や独自性を重視した、各種の市民サービスに向けた「オンリーワンの取り組み」を生み出す原動力でもある。

そうした行政の前向きな姿勢は、情報化を推進する上で不可欠な情報発信（シティプロモーション）の源泉ともなり、現代の子育て世代が求める「住民のニーズに柔軟に耳を傾け、対応してくれるまち」を実現する要件の一つともなりうるだろう。

葛城市における「オンリーワンのまちづくり」という意味では、「相撲」に関する取り組みもその一つだ。取材後の本年8月4日、開催中の「大阪・関西万博」のEXPOメッセ「WASSE」において、「相撲の始祖・當



大阪・関西万博で開催された「SUMO EXPO2025」の模様（相撲甚句）



大阪・関西万博「SUMO EXPO2025」には国内外の相撲ファン、観光客が集まり、興味津々の様子で見入っていた

麻蹶速の生誕地」である葛城市の阿古市長をはじめ、いずれも「相撲にゆかり」の伝承や実績を持つ、全国9市町の首長たちを実行委員とする相撲の大祭典《SUMO EXPO 2025》が開催され、国内外に発信されるとともに、大きな反響をもたらした。

葛城市では、持ち前の「住みよさ」「子育てのしやすさ」に加え、『第2期葛城市総合戦略』の骨子でもある「移住支援／子育てに係る各種支援・取組を通じた人口増加」「集客支援／観光業を基幹とした産業の振興」「定住支援／地域コミュニティの強化を通じた地域の紐帯強化」の3要素を、持続可能なまちづくりの基盤としている。

葛城市

市 政 ル ポ

(奈良県)



力士のソウルフード「ちゃんこ鍋」を発信する「げはやちゃんこ鍋コンテスト」は、相撲発祥地を持つ葛城市ならではのイベント（第2回コンテスト・表彰式）



葛城市観光協会主催「ワンパク相撲」の模様

開発（葛城IC周辺まちづくり事業）など、多角的な基盤整備の準備を進めている。

また、令和6年に始まったばかりの「芝桜まつり」（会場は《道の駅かつらぎ》多目的広場およびしあわせの森公園）が、早くも4月の恒例行事になるほどの人気を博すなど、オリジナリティーの



「ちゃんこの学校給食」は年に1回、「げはやちゃんこ鍋コンテスト」入賞作品のレシピを使用し、市内の公立学校・幼稚園で提供

「葛城市は當麻蹶速の生誕地であり、隣接する香芝市も、相撲発祥地としてのゆかりがあります。また、桜井市には相撲神社があります。そんなことから平成29（2017）年、葛城市・桜井市・香芝市の3市で『大和まほろば相撲連絡協議会』を設立。大阪・関西万博《SUMO EXPO2025》では葛

例えば「相撲の発祥地」という地域資源（地域財産）の活用についても、自己水源としてのため池の活用と同様、類例の少ない独自の取り組みを可能にするのに適した、葛城市ならではの「強み」を示すコンテンツの一つといえるだろう。

城市と桜井市の2市が実行委員に名前を連ねています。

また、葛城市では、日本相撲協会の規格に準拠し、なおかつ誰もが自由に土足で上がれる土俵を備えた相撲館「げはや座」があります。ここではワンパク相撲大会や相撲甚句の開催、女性も上がれる土俵体験など、多彩なイベントを行っているほか、ちゃんこ鍋のブランド化を目的とする《げはやちゃんこ鍋コンテスト》を毎年実施しており、その模様も全て全国発信しています（阿古市長）

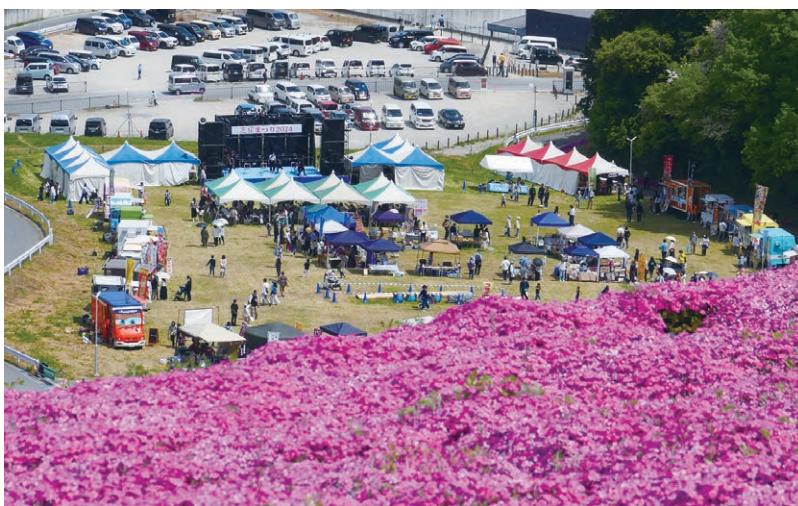
特にインバウンドも含めた観光振興は「集客支援・移住支援・定住支援」の全般に影響を及ぼす重要な事業だ。そのために必要な当面の取り組みとして、葛城市では現在、旧奈良県社会教育センター跡地への宿泊施設の誘致や、南阪奈道路・葛城IC周辺の

ある新たなイベントの開発・定着についても、着々と布石を打っている。

民間出身の阿古市長がけん引する、「自立性・独自性」への模索が何事においても基調に感じられる葛城市のまちづくり。

悠久の歴史が育んだ各種の地域資源（地域財産）を活用しながらも、常に時代の潮流を取り入れたアップデートを忘れない、その柔軟な姿勢こそが、現代の葛城市における「住みよさ」「子育てのしやすさ」の源泉になっているのではないだろうか。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和7年5月19日）



令和6年に始まったばかりの「芝桜まつり」は、予想以上の来場者でにぎわっている